

夜叉ヶ池

泉鏡花

青空文庫

場所 越前国大野郡鹿見村琴弾谷

時 現代。——盛夏

人名 萩原晃（鐘楼守）

百合（娘）

山沢学円（文学士）

白雪姫（夜叉ヶ池の主）

湯尾峠の万年姥（眷属）

白男の鯉七

大蟹五郎

木の芽峠の山椿

鯖江太郎

鯖波次郎

虎杖の入道

十三塚の骨

夥多の影法師

黒和尚鯨入（剣ヶ峰の使者）

与十（鹿見村百姓）

その他大勢

鹿見宅膳（神官）

権藤管八（村会議員）

斎田初雄（小学教師）

畑上嘉伝次（村長）

伝吉（博徒）

小烏風呂助（小相撲）

穴隈鉦蔵（県の代議士）

劇中名をいうもの。——（白山剣ヶ峰、千蛇ヶ池の公達）

三^{みくに}国^{だけ}岳^の麓^{ふもと}の里^に、暮^{くれむ}六^つつの鐘^ききこゆ。——幕^{まく}を開^{ひら}く。

萩^{はぎ}原^{はら}晃^{あきら} この時^{とき}白^{しろ}髪^がのつくり、鐘^{しょう}楼^{ろう}の上^{うへ}に立^たちて夕^{せき}陽^{よう}を望^{のぞ}みつつあり。鐘^{かね}楼^{ろう}は柱^{はしら}に蔦^{つた}からまり、高^{たか}き石^{いし}段^{だん}に苔^{こけ}蒸^むし、棟^{むね}には草^{くさ}生^{せい}ゆ。晃^{あきら}やがて徐^{おもむろ}に段^{だん}を下^{くだ}りて、清^{しみず}水^{みづ}に米^{こめ}を磨^とぐお百^{ひゃく}合^ごの背^せ後^ごに行^いく。

晃 水は、美しい。いつ見ても……美しいな。

百合 ええ。

その水^{みづ}の岸^{かた}に菖^{あやめ}蒲^めあり二三輪^{りん}小^こさき花^{はな}咲^さく。

晃 綺麗^{きれい}な水^{みづ}だよ。(微^{ほほ}笑^えむ。)

百合 (白^{しろ}髪^がの鬢^{びん}に手^てを当^{あた}てて)でも、白^{しろ}いのでございますもの。

晃 そりや、米^{こめ}を磨^といでいるからさ。……(框^{かまち}の縁^{えり}に腰^{こし}を掛^かく)お勝^{かち}手^て働^{はたら}き御^ご苦^く勞^{らう}、せつかくのお手^てを水^{みづ}仕^じ事^じで台^{たい}なしは恐^{おそ}多い、ちとお手^て伝^{でん}いと行^いこうかな。

百合 可^ようございますよ。

晃 いや……お手^て伝^{でん}いという処^{ところ}だが、お百^{ひゃく}合^ごさんのそうした処^{ところ}は、咲^さ残^{のこ}った菖^{あやめ}蒲^めを透^といて、水^{みづ}に影^{かげ}が映^{うつ}したようでお綺麗^{きれい}だ。

百合 存じません。

晃 賞^ほめるのに怒^{やつ}る奴^{やつ}がありますか。

百合 おなぶり遊ばすんでございますものを。——そして旦那様^{だんなさま}は、こんな台所へ出ていらつしやるものではありません。早くお机の所へおいでなさいまし。

晃 鐘を撞^つく旦那はおかしい。実は権助^{ごんすけ}と名を替えて、早速お飯^{まんま}にありつきたい。何とも可^{おそろし}恐^{おそろし}く腹が空いて、今、鐘を撞いた撞木^{しゆもく}が、杖^{つえ}になれば可^いいと思つた。ところで居催促^{いせいそく}という形^{かた}もある。

百合 ほほほ、またお極^{きま}り。……すぐお夕飯にいたしましうねえ。

晃 手品じゃあるまいし、磨いでいる米が、飯に早変わりはしそうもないぜ。

百合 まあ、あんな事を——これは翌朝^{あした}の分を仕掛けておくのでございますよ。

晃 翌朝の分——ああ、お所帯^{しよたい}もち、さもあるべき事です。いや、それを聞いて安心したら、がっかりして余計空いた。

百合 何でございますねえ。……お菜^{かず}も、あの、好きな鳴焼^{しぎやき}をして上げますから、おとなしくしていらつしやいまし。お腹が空いたって、人が聞くと笑います。

晃 (縁を上る) 誰に遠慮がいるものか、人が笑うのは、ね、お前。

百合 はい。

晁 お互いに朝寝の時——

百合 知りませんよ。(莞爾俯向く。)

晁 煩く蚊が押寄せた。裏縁で燻してやろう。(納戸、背後むきに山を仰ぐ) ……雲

の峰を焼落した、三国ヶ岳は火のようだ。西は近江、北は加賀、幽に美濃の山々峰々、
数万の松明を列ねたように早の焰で取巻いた。夜叉ヶ池へも映るらしい。ちようどそ
の水の上あたり、宵の明星の色さえ赤い。 ……なかなか雨らしい影もないな。

百合 ……その竜が棲む、夜叉ヶ池からお池の水が続くと申します。この清水も気のせ
いやら、流が沢山瘦せました。このごろは村方で大騒ぎをしています。 ……暑さは強し
……貴方、お身体に触りはしますまいかと、——めしあがりものの不自由な片山里は心
細い。私はそれが心配でなりません。

晁 流が細ったつて構うものか。お前こそ、その上夏瘦せをしないが可い。お百合さん、
その夕顔の花に、ちよつと手を触つてみないか。

百合 はい、どういたすのでございますか。

晁 花にも葉にも露があろうね。

百合 ああ冷い。水の手にも涼しいほど、しっとり花が濡れましたよ。

晃 世間の人には金が要ろう、田地も要ろう、雨もなければなるまいが、我々二人活いきるには、百日照つても乾きはしない。その、露があれば沢山なんだ。(戸外おもてに向える障子を閉す。)

百合 貴方、お暑うございましょう。開けておおきなさいましても、もう、そちこち人も通りますまい。

晃 何、更つて、そんな心配をするものか。……晩方閉とじ込んで一ひと燻し燻しておく、蚊が大分楽になるよ。

時に蚊遣かやりの煙なびく、

学円 日に焼けたるパナマ帽子、背広おちつきの服、落着おちつきのある人じん体ていなり。風呂敷包はすを斜しやに背しよい、脚絆きゃはん草鞋わらじ穿はき、ステッキ杖こうもりづくりの洋傘ようさんをついて、鐘楼の下に出づ。打仰ぎ鐘を眺め、

学円 今朝、明六あけむつの橋を渡つて、ここで暮六つの鐘を聞いた。……
お百合は筈はずに米をうつす。

学円 やあ、お精が出ます。(と声を掛く。)

百合 はい。(見向く。)

学円 途中、なわての竹藪たけやぶの処へ出て……暗くなつた処で、今しがた聞きました。時を打つたはこの鐘でしような。

百合 さようでございます。

学円 音も尊い！……立派な鐘じや。つりがねどうあが鐘楼へ上つてみても差支えはありませんか。

百合 (箆ざるを抱えて立つ) ええ、大事ござんせん。けれども貴客あなた、御申戯ごじようだんに、お杖やなんぞでおたた敲き遊ばしては不可いけません。

学円 すいか西瓜を買うのではありません。決してたた敲いてはみません。(笑う。)

百合 御申戯おつしやいます。……いいえ、悪戯いたずらを遊ばすようなお方とは、お見受け申しはしませんけれど、その鐘は、明六つと、暮六つと、夜中うしみつ丑満に一度、——三度のほかは鳴らさない事になっておりますから、失礼とは存じましたが、ちよつと申上げたのでございます。さあ、どうぞ御遠慮なく、上つて御覧なさいまし。(夕顔の垣根について入んとす。)

学円 ああ、ちよつと……お待ち下さい。鐘を見ようと思ひますが、ふと言ことばを交わしたを御縁に、余り不躰ぶしつけがましい事じやが、茶なりと湯なりと、一杯お振舞い下さらんか。

百合 お易い事でございます。さあ、貴客、これへお掛けなさいまし。

学円 御免下さいよ。

百合 真に見苦しゅうございます。

学円 これは——お寺の庫裡とも見受ません。御本堂は離れていますか。

百合 いいえ、もう昔、焼けたと申しまして、以前から、寺はないのでございます。

学円 鐘ばかり……

百合 はい。

学円 鐘ばかり……成程、ところで西瓜の一件じゃ。（帽子を脱ぐ、ほとんど剃髪した

るごとき一分刻の額を撫でて）や、西瓜と云えば、内に甜瓜でもありますまいか。

——茶店でもない様子——（見廻す。）

片山家の暮れ行く風情、茅屋の低き納戸の障子に灯影映る。

学円 この上、晩飯の御難題は言出しませんが、いかんとも腹が空いた。

百合 ほほ。（と打笑み）笥の下に、梨が冷してござんす、上げましょう。（と夕顔の蔭

に立廻る。）

学円 （がぶがぶと茶を呑み、衣兜から扇子を取って、煽いだのを、と翳して見つつ）

おお、咲きました。貴女の顔を見るように。

百合 ええ？（聞返す。）

学円 いや、髪の色を見るように。

百合 もう、年をとりますと、花どころではございません。早く干瓢にでもなりますれば、……とそればかりを待つております。

学円 小刀をこれへお遣わし……私が剥きます。——お世話を掛けてはかえつて気遣いな。

どれどれ……旅の事欠け、不器用ながら、梨の皮ぐらいは、うまく剥きます。おおお氷よりよく冷えた。玉を削るとはこの事じやろう。

百合 旅を遊ばす御様子にお見受け申します……貴客は、どれから、どれへお越しなさいますえ？

学円 さて名告りを揚げて、何の峠を越すと云うでもありません。御覧の通り、学校に勤めるもので、暑中休暇に見物学問という処を、遣つて歩行く……もつとも、帰途です。——涼しくば木の芽峠、音に聞こえた中の河内か、（廂はずれに山見る眉）峰の茶店に茶汲女が赤前垂というのが事実なら、疱瘡の神の建場でも差支えん。湯の尾峠を越そうとも思います。——落着く前は京都ですわ。

百合 お泊りは？ 貴客、今晚の。

学円 ああ、うっかり泊りなぞお聞きなさらぬが可い。言尻ことばじりに着いて、宿の御無心申

さんとも限らんぞ。はははは、いや、串戯じょうだんじゃ。御心配には及ばんが、何と、その

湯の尾峠の茶汲女は、今でも赤前垂じやろうかね。

百合 山また山の峠の中に、嘘のようにもお思いなさいましょうが、まったくだと申しま
す。

学円 谷の姫百合も緋色ひいろに咲けば、何もそれに不思議はない。が、この通り、山ばかり、

重りかさなかさな累る、あの、巔いただきを思うにつけて、……夕焼雲が、めらめらと巖いわに焼込むように見

える。こりや、赤前垂より、雪女郎すこで凄うても、中の河内が可いかも分らん。何にしろ、

暑い事じゃね。——やつとここで呼吸いきをついた。

百合 里では人死ひとしにもありますツて……酷ひどい早ひでりでございますもの。

学円 今朝から難行なんぎよう苦行きぎようの体ていで、暑さに八九里悩みましたが——可おそろ恐おそろしい事には、水

らしい水というのを、ここに来てはじめて見ました。これは清水と見えます。

百合 裏の岨がけから湧わきますのを、笕かけひにうけて落します……細い流ながれでございしますが、石に当

つて、りんりんと佳いい音ねがしますので、この谷を、あの琴弾谷ことひきだにと申します。貴客、そ

れは、おいしい冷い清水。……一杯汲んで差上げましょうか。

学円 何が今まで我慢が出来よう、鐘堂も知らない前に、この美しい水を見ると、逆蜻蛉で口をつけて、手で引掴んでがぶがぶと。

百合 まあ、私はどうしましょう、知らずにお米を磨きました。

学円 いや、しらげ水は菖蒲の絞、夕顔の花の化粧になったと見えて、下流の水はやつぱり水晶。ささ濁りもしなかった。が、村里一統、飲む水にも困るらしく見受けたに、この源まで来ないのは格別、流れを汲取るものもなかったように思う……何ぞ仔細のある事じやろうか。

百合 あの、湧きますのは、裏の畦でござんすけれど。

学円 はあ、はあ。……

百合 水の源はこの山奥に、夜叉ヶ池と申します。凄いで大池がございます。その水底には竜が棲む、そこへ通うと云いまして——毒があると可恐がります。——もう薄暗く見えまますまいけれども、その貴客、流の石には、水がかかって、紫だの、緑だの、口紅ほどな小粒も交つて、それは綺麗でございますのを、お池の主の眷属の鱗がこぼれたなんのツて、気味が悪いと申すんでございますから。……

学円 綺麗な石が毒蛇の鱗？ や、がぶがぶと、豪えらいことを遣やつてしもうた。（と扇子を
もつて胸を打つ。）

百合 まあ、（と微笑ほほえみ）私どもがこの年まで朝夕飲んで何ともない、それをあの、人は
疑うのでございます。

学円 もっとも、もっとも。ものを疑うのは人間の習いですよ。私わしは今のお言ことばで、決して
心配はしますまい。現に朝夕飲んでおられる、——この年とし紀まで——（と打ちまもり）お
幾歳いくつじやな。

百合 ……………

学円 まあさ、失礼じやが、お幾歳です？

百合 御免なさいまし、……忘れしました。……

学円 ははは、俚言ことわざにも、婦人に対して、貴女はいつ死ぬとは問うても可いい。が、いつ
生れた、とは聞くな——とある。これは無遠慮に出過ぎました。……お幾歳いくつじやと年とし紀
は尋ねますまい。時に幾干いくちですか。

百合 幾干かとおっしゃって？

学円 代価じや。

百合 あの、お代、何の？……お宝……ま、滅めつそう相な。お茶代なぞ頂くのではないのでござんす。

学円 茶も茶じゃが、いやあれは、髻ひげのようにもじやもじやと聞えておかしい。茶も勿論、梨を十分に頂いた。お商売でのうても無代価では心苦しい。ずばりと余計なら黙つても差置きますが、旅空なり、御覧の通りの風体ふうてい。ちゃんと云うて取つて下さい。

百合 そうまでお気が済みませんなら、少々お代を頂きましようか。

学円 勿論ともな。

百合 でも、あの、お代とさえ申しますもの、お宝には限りません。そのかわり、短いのも可ようござんす、お談話を一つ、お聞かせなすつて下さいましな。

学円 談話をせい、……談話とは？

百合 方々旅を遊ばした、面白い、珍しい、お話しでございます。

学円 その談話を？

百合 はい、お代のかわりに頂きます。貴客あなたには限りませず、薬売の衆、行ぎよう者しや、巡礼どなた、この村里の人たちにも、お間に合うものがござんして、そのお代をと云う方には、誰方どなたにも、お談話を一条ひとつずつ伺います。沢山たんとお聞かせ下さいますと、お泊め申しもするので

ござんす。

学円 むむ、これこそ談話じや。(と小膝を拍て) 面白い。話しましょう。……が、さて談話というて、差当り——お茶代になるのじやからつて、長崎から強飯でもあるまいな。や、思出した。しかもこの越前じや。

晃 (細く障子を開き差覗く。)

時に小机に向いたり。双紙を開き、筆を取りて、客の物語る所をかき取らんとしたるなるが、学円と双方、ふと顔を合せて、何とかしけん、燈火をふつと消す。

百合 どんなお話、もし、貴客。

学円 ……時にここで話すのを、貴女のほかに聞く人がありますかね。

百合 いいえ、外にはお月様ばかりでござんす。

学円 道理こそ燈が消えて、ああ、蚊遣の煙で、よくは見えぬが、……納戸に月が射すらしい。——お待ちなさい。今、言いかけた越前の話というのは、縁の下で牡丹餅が化けたのです。たとえば、ここで私がものを云うと、その通り、縁の下で口真似をする奴がある。村中が寄つて集つて、口真似するは何ものじや。狐か、と聞くと、違う。と答える。狸か、違う、獺か、違う、魔か、天狗か、違う、違う。……しまいに牡丹餅か、と

尋ねた時、おうと云つて消え失せたという——その話をする気であつたが、……まだ外に、月が聞くと言わるるから、出直して、別の談話はなしをする気になつた。お聞きなさい。

これは現在一昨年おとしの夏——

一人、私わしの親友に、何かかねて志す……国々に伝わつた面白い、また異かわつた、不思議な物語を集めてみたい。日本中残らずとは思うが、この夏は、山深い北ほつこく国筋の、谷を渡り、峰を伝つて尋ねよう、と夏休みに東京を出ました。——それつきり、行方が知れず、音沙汰おとさたなし。親兄弟もある人物、出来る限り、手を尽くして捜したが、皆目跡あとかた形が分らんから、われわれ友だちの間にも、最早もはや世にない、死んだものと断念あきらめて、都を出た日を命日にする始末。いや、一時は新聞沙汰、世間で豪い騒えらぎをした。……

自殺か、怪我けがか、変死かど、果敢はかない事に、寄ると触ると、袂たもとを絞つて言い交わすぞ！

あとを隠すにも、死ぬのにも、何の理由もない男じやに、貴女、世間には変つた事ことが
ありましような。……

百合 ああ、貴客あなた、貴客、難ありがと有う存じます。……ほんとうに難有う存じました。(とに
べなく言う。)

学円 そんなに礼を云うて、茶代のかわりになるのですかい。

百合 もう沢山でございます。

学円 それでは面白かったのじゃね。

百合 ……おもしろいのは、前の牡丹餅の化けた方、あとのは沢山でございます。

学円 さて談話はこれからなんじや、今のはほんの前提ですが。

百合 どうぞ、……結構でございますから、……そして貴客、もう暗くなります、お宿をお取り遊ばすにも御不自由でございませうから。……

学円 いやいや、談話の模様では、宿をする事もあると言われた。私も一つ泊めて下さい、——この談話は実がありますから。

百合 先刻は、貴客、女の口から泊りの事なぞ聞くんじゃない。……その言について、宿の無心でもされたらどうするとおっしゃって。……もう、清い涼いお方だと思いましたが、ものを、……女ばかり居る処で、宿貸せなぞと、そんな事、……もう、私は気味が悪い。

学円 気味が悪いな？ 牡丹餅の化けたのではないですが。

百合 こんな山家は、お化けより、都の人が可恐うござんす、……さ、貴客どうぞ。

学円 これは、押出されるは酷い。（不承々に立つ。）

百合 （続いて出で、押遣るばかりに）どうぞ、お立ち下さいまし。

学円 婦人ばかりじや、ともこうも言われぬか。鉢の木ではないのじやが、蚊に焚く柴もあるものを、……常世の宿なら、こう情なくは扱うまい。……雪の降らぬがせめてもじや。

百合 真夏土用の百日早に、たとい雪が降ろうとも、……（と立ちながら、納戸の方を熟と視て、学円に瞳を返す。）御機嫌よう。

学円 失礼します。

晃 （衝と蚊遣の中に姿を顕し）山沢、山沢。（ときっぱり呼ぶ。）

学円 おい、萩原、萩原か。

百合 あれ、貴方。（と走り寄つて、出足を留めるように、膝を突き手に晃の胸を压える。）

晃 帰りやしない、大丈夫、大丈夫。（と低声に云つて）何とも言いようがない、山沢、まあ——まあ、こちらへ。

学円 私も何とも言いようが無い。十に九ツ君だろつと、今ね、顔を見た時、また先刻からの様子でもそう思うた、けれども、余り思掛けなし——（引返して柩に來り）第一、その頭はどうしたい。

晃 頭もどうかしていると思つて、まあ、許して上つてくれ。

学円 埃ほこりばかりじゃ、失敬するぞ、（と足を拭ふいたなりで座に入る）いや、その頭も頭じ

やが、白髪はどうじゃ、白髪はよ？……

晃 これか、谷底に棲すめばといつて、大蛇うわばみに呑まれた次第わけではない、こいつは仮髪かつらだ。

（脱いで棄てる。）

学円 ははあ……（とお百合を密そつと見て）勿論もちろんじゃな、その何も……

晃 こりや、百合と云う。

お百合、座に直つた晃の膝に、そのまま俯伏うつぶして縋すがっている。

学円 お百合さんか。細君も……何、奥方も……

晃 泣く奴があるか、涙を拭ぬぐいて、整然ちやんとして、御挨拶ごあいさつしな。

と云ううちに、極きまり悪そうに、お百合は衝つと納戸へかくれる。

晃 君に背中を敲たたかれて、僕の夢が覚めた処で、東京に帰るかつて憂慮きつかいなんです。

学円 （お百合の優しさに、涙もろく、ほろりとしながら）いや、私の顔わしを見たぐらいで、

萩原——この夢は覚めんじやろう。……何、いい夢なら、あえて覚めるには及ばんのじ

や……しかし萩原、夢の裡うちにも忘れまいが、東京の君の内では親御はじめ、

晃　むむ。

学円　君の事で、多少、それは、寿命は縮められたか分らんが、皆まず御無事じや。

晃　ああ、そうか。ありがた難有い。

学円　私わしに礼には及ばない。

晃　実に済まん！

学円　さてこれはどうしたわけじや。

晃　夢だと思つて聞いてくれ。

学円　勿論、夢だと思つておる。……

晃　委くわしい事は、夜すがらにも話すとして、知つてる通り……僕は、それ諸国の物語を聞こうと思つて、北国筋を歩行あるいたんだ。ところが、自身……僕、そのものが一条ひとくだりの物語になつた訳だ。——魔法つかいは山を取つて海に移す、人間を樹にもする、石にもする、石を取つて木の葉こにもする。木の葉を蛙かえるにもするという、……君もここへ来たばかりで、もの語かたりの中の人になつたらう……僕はもう一層、その上を、物語、そのものになつたんだ。

学円　薄気味の悪い事を云うな。では、君の細君は、……（云いつつ憚はばかる。）

晃 (納戸を振向く) 衣服でも着換えるか、髪など撫つけているだろう。……襖一重だから、背戸へ出た。……

学円 (伸上り納戸越に透かして見て) おい、水があるか、蘆の葉の前に、櫛にも月の光が射して、仮髪をはずした髪の艶、雪国と聞くせいとか、まだ消残って白いように、襟脚、脊筋も透通る。……凄いまで美しいが、……何か、細君は魔法つかいか。

晃 可哀想な事を言え、まさか。

学円 ふん。

晃 この土地、この里——この琴弾谷が、一個の魔法つかいだと云うんだよ。——

山沢、君は、この山奥の、夜叉ヶ池というのを聞いたか。

学円 聞いた。しかもその池を見ようと思つて、今庄駅から五里ばかり、わざわざこ

こまで入込んだのじゃ。

晃 僕も一昨年、その池を見ようと思つて、ただ一人、この谷へ入ったために、こういう

次第になつたんだ。——ここに鐘がある——

学円 ある！ 何か、明六つ、暮六つ……丑満、と一昼夜に三度鳴らす。その他は一切

音をさせない定じやと聞いたが。

晃 そうだよ。定として、他は一切音をさせてはならない、と一所にな、一日一夜に三度
ずつは必ず鳴らさねばならないんだ。

学田 それは？

晃 ここに伝説がある。昔、人と水と戦つて、この里の滅びようとした時、越の大徳

泰澄が行力ちよう りきで、竜神をその夜叉ヶ池に封込ふうじこんだ。竜神の言うには、人の溺れ、

地の沈むを救うために、自由を奪わるるは、是非に及ばん。そのかわりに鐘を鑄て、麓
に掛けて、昼夜に三度ずつ撞鳴つきならして、我を驚かし、その約束を思出させよ。……我が

性は自由を想う。自在を欲する。氣ままを望む。ともすれば、誓を忘れて、狭き池の水

をして北陸七道に漲みなぎらそうとする。我が自由のためには、世の人畜の生命など、ものの

数ともするものでない。が、約束は違えぬ、誓は破らん——但しその約束、その誓を忘

れさせまい。思出させようとするために、鐘を撞く事を怠るな。——山沢、そのために

鑄た鐘なんだよ。だから一度でも忘れると、たちどころに、大雨、大雷、大風ととも

に、夜叉ヶ池から津浪が起つて、村も里も水の底に葬つて、竜神は想うままに天地を馳

すると……こう、この土地で言伝える。……そのために、明六つ、暮六つ、丑満つ鐘を

撞く。……

学円 (乗出でて) 面白い。

晃 いや、面白いでは済まない、大切な事です。

学円 いかにも大切な事じゃ。

晃 ところで、その鐘を撞く、鐘撞き男を誰だと思う。

学円 君か。

晃 僕だよ。すなわち萩原晃がその鐘撞夫かねつきなんだよ。

学円 はてな。

晃 ここに小屋がある……

学円 むむ。

晃 鐘撞かねつきが住む小屋で、一昨年おとししの夏、私が来て、代るまでは、弥太兵衛やたべえと云う七十九になる爺じいさん様が一人居て、これは五十年このかた以来、いかな一日も欠かす事なく、一昼夜に三度ずつこの鐘を打っていた。

山沢、花は人の目を誘う、水は人の心を引く。君も夜叉ヶ池を見に来たと云う。私がやつぱり、池を見ようと、この里へ来た時、暮六つの鐘が鳴ったんだ。弥太兵衛しじい爺に、鐘の所謂いわれを聞きながら、夜があけたら池まで案内させる約束で、小屋へ泊めて貰った処。

その夜、丑満うしみつの鐘しょうろうを撞ついて、鐘しょうろう楼ろうの高い段から下りると、爺じいは、この縁えんさき前まへで打ぶ倒たおれた——急病だ。死ぬ苦くる惱しみをしながら、死切れないと云いつて、悶もたえる。——こうした世間だ、もう以前から、村一統鐘の信心たなそこが消えている。……爺じいが死んだら、誰も鐘を鳴らすものがない。一度でも忘れると、掌たなそこをめぐらさず、田地田畠、陸は水になる、沼になる、淵ふちになる。幾万、何千の人の生命いのち——それを思うと死ぬるも死切れぬと、呻う吟めいて搔もがく。——虫より細い声だけれども、五十年の明あけくれ暮くれを、一生懸命、そうした信仰で鐘楼を守り通した、骨と皮ばかりの爺じいが云うのだ。……鐘おのずの自みづかから鳴ることく、僕の耳みみに響ひびいた。……且かつは臨終りんしゅうの苦患くげんの可哀あわれさに、安心あんしんをさせようと、——心配しんぱいをするな親仁おやし、鐘は俺おれが撞ついてやる、——とはつきり云うと、世にも嬉うれしそうに、ニヤニヤと笑わらつて、拝をみながら死んだ。その時の顔かほを今いまに忘れん。

が、まさか、一生、ここに鐘を撞ついて終しまろうとは思おもわなかった。丑満は爺じいが済しました、明六つの鐘一度ばかり、代かつて撞つくぐらいにしか考かんえなかつた。が、まあ、爺じいが死ぬ、村むらのものを呼よぼうにも、この通とほり隣家となりに遠とほい。三度さんどの掟おきてでその外ほかは、火にも水にも鐘を撞つくことはならないだろう。

学まな円ま その鳴ならしてならないというは、どうした次第わじゃね？

晃 鐘は、高く、ここにあって——その影は、深く夜叉ヶ池の碧潭へきたんに映ると云う。……
撞しゅもく木を当てて鳴る時は、凢こがらしにすら、そよりとも動かない、その池の水が、さらさらと
波を立てると聞く。元来、竜神を驚かすために打鳴らすのであるから、三度のほかに騒
がしては、礼を欠く事に当る。……

学円 その道理じゃ、むむ。

晃 鐘も鳴らせん……処で、不知案内の村を駈かけまわ廻まわつて人を集めた、——サア、弥太兵衛

の始末は着いたが、誰も承合うけあつて鐘を撞つこうと言わない。第一、しかじかであるからと、
爺じいに聞いた伝説を、先祖の遺言おごそかのように厳おごそかに言つて聞かせると、村のものは哄どつと笑う。

……若いものは無理もない。老としより寄よりどもも老寄よりどもなり、寺の和尚おしょうまでけろりとして、
昔話なら、桃太郎の宝を取つて帰つた方が結構でござる、と言う。癩しやくに障さつた——勝手
にしろ、と私もそこから、(と框かまちを指し)草鞋わらしを穿はいて、すたすたとこの谷を出て帰つ
たんだ。帰る時、鹿見村しかみむらのはずれの土橋の袂たもとに、榎えのきの樹の下に立つてしよんぼりと見
送つたのが、(と調子を低く)あの、婦人おんなだ。

その日の、明六つの鐘さえ、学校通いの小児こどもをはじめ、指ゆびしをして笑う上で、私が撞つ
いた。この様子では、最早や今日から、暮六つの鐘は鳴るまいな……

もしや、岩抜け、山津浪、そうでもない、大暴風雨で、村の滅びる事があつたら、打明
 けた処……他は構わん、……この娘の生命もあるまい——待て、二三日、鐘堂を俺
 が守ろう。その内には、とまた四五日、半月、一月を経るうちに、早いものよ、足掛け
 三年。——君に逢うまで、それさえ忘れた。……また、忘れるために、その上、年に老
 朽ちて世を離れた、と自分でも断念のため。……ばかりじゃ無い、……雁、燕の行きか
 えり、軒なり、空なり、行交う目を、ちよつとは紛らす事もあるうと、昼間は白髪の仮
 髪を被る。

学円（黙然として顔を見る。）

晃（言葉途絶える）そう顔を見るな、恥入った。

学円（しばらく、打案じ）すると、あの、……お百合さんじゃ、その人のために、ここ
 に隠れる気になつたと云うのじゃ。

晃 ……ますます恥入る。

学円 いや、恥ずるには及ばん。が、どうじゃ、細君を連れて東京に帰るわけには行かん
 のかい。

晃 何も三ヶ国と言わん。越前一ヶ国とも言わん。われわれ二人が見棄てて去つて、この

村と、里と、麓ふもとに棲すむものの生命をどうする。

学円 萩原、（と呼びつつ、寄り）で、君はそれを信ずるかい。

晁 信ずる、信ずるようになった。萩原晁はいざ知らん、越前国三国ヶ岳の麓、鹿見村琴こ
とひきだにとひきだに 弾谷しやうろうもりの鐘楼守、百合の夫の二代の弥太兵衛は確たしかに信じる。

学円 （ひたりと洋服の胡坐あぐらに手をおき）何にも言わん。そう信ぜい。堅く進ぜい。奥方

の人を離れた美しさを見るにつけても、天がこの村のために、お百合さんを造り置いて、

鐘楼守を、ここに据えられたものかも知れん。君たち二人はふたはしら柱の村の神じや。就な

中かんずく、お百合さんは女神じやな。

百合 （行燈あんどんを手に黒髪美しく立出づる）私、どうしたら可ようございましょう。

学円 や、これは……

百合 貴客あなた、今ほどは。

学円 さて、お初に……はははは、奥さん。

百合 まあ。……（と恥らう。）

晁 これ、まあ……ではない、よく御挨拶申しな、兄とおなじ人だ。

百合 （黙って手をつく。）

学円 はいはい。いや、御挨拶はもう済みました。貴女あなをは出ませなんだか。

晁 うっかり嚏くしゃみなんぞすると、蚊かが飛出す。

百合 あれ、沢山たんとおなぶんなさいまし。

晁 そんなに、お前、白粉おしろいを粧つけて。

百合 あんな事ばかりおつしやる。(と優しくにら睨にらんで顔を隠す。)

学円 何にしろ、お睦むつまじい……はははははは、勝手にうわざお噂うわさをしましたが、何は、お里方、親

御、御兄弟は？

晁 山沢、何にもない孤児みなしごなんだ。鎮守の八幡はちまんの宮の神官かんぬしの一人娘で、その神官の

父親おしさんも亡くなつた。叔父があつて、それが今、神官の代理をしている。……これの

前だが、叔父というのは、了りようけん簡けんのよくない人だな。

学円 それはそれは。

晁 姪めいのこれを、附けつ廻まわつしたという大難おほがたぶつです。

百合 ほんとうに、たよりのない身体からだでございます。何にも存ぞんじません、不束ふつつかものでござ

いますけれど、貴客あなた、どうぞ御ごふびんをお懸かけなすつて下さいまし。(しんみりと学

円に向つて三指みつゆびして云う。)

学円（引き入れられて、思わず涙ぐむ。）御殊勝ですな。他人のようには思いません。

晃（同じく何となく胸せまる。涙を払つて）さあさあ、親類というお言葉なんだ。遠慮のない処、何にも要らん。御吹聴ごふいちようの鳴焼しぎやきで一杯つけな。これからゆつくり話すんだ。山沢、野菜は食わしたいぜ、そりや、甘いぞ。

学円 奥方、お立ちなさるな。トそこでじやな、萩原、私は志した通り、これから夜を掛けて夜叉ヶ池を見に行くゆ気じや。種々いろいろ不思議な話を聞いたら、なお一層見たくなつた。御飯はお手料理で御馳走ごちそうになろうが、お杯には及ばん、第一、知つてる通り、一滴も飲めやせん。

晃 成程、そうか、夜叉ヶ池を見に来たんだ。……明日あしたにしては、と云うんだけれども、道は一里余り、が、上りが嶮けわしい。この暑さでは夜が可いい。しかし、四五日は帰さんから、明日の晩にしてくれないかい。

学円 いや、学校がある。これでも学生の方ではないから勝手に休めん。第一、遊び過ぎ
て、もう切詰めじや。

晃 それは困つた、学校は？……先刻さつぎ、落着く先は京都だと云つたようだな。

学円 むむ、去年から。……みやづかえの情なさけなさじや。何しろ、急ぐ。

晃 分つた、では案内かたがた一所に行く。

学円 君も。

晃 ……直ぐに出掛けよう。

学円 それだと、奥方に済まんぞ。

晃 何を詰らない。

百合 いいえ……（と云いしがしおしおと）貴方、直ぐにとおっしゃって、……お支度は、

……

晃 土橋の煮染屋で竹の皮づつみと遣らかす、その方が早手廻だ。鯿の煮びたし、焼ど

うふ、可かろう、山沢。

学円 結構じや。

晃 事が決れば早いが可い。源佐衛門は草履で可し、最明時どのは、お草鞋、お草鞋。

学円 やあ、おもしろい。奥さん、いずれ帰途には寄せて頂く。私は味噌汁が大好きです。

小菜を入れて食べさして発せて下さい。時に、帰途はいつになろう。……

晃 さあ、夜が短い。明方になろうも知れん。

学円 明けがた……は可いが、（と草鞋を穿きながら）待て待て、一所に気軽に飛出して、

今夜、丑満つの鐘はどうするのじや。

晁 百合が心得ておる。先代弥太兵衛と違う。仙人ではない、生身の人間。病氣もする、百合が時々代るんだよ。

学円 では、池のあたりで聞きましよう。——奥方しつかり願います。

百合 はい、内をお忘れなさいませんに、私は一生懸命に。（と涙声にて云う。）

晁 ……おい、あの、弥太兵衛が譲りの、お家の重宝ちようほうと云う瓢箪ひょうたんを出したり、酒を買う。——それから鎌を貸しな、滅多に人の通わぬ処、路はあつても熊笹ぐらいは切らざあなるまい。……早くおし。

百合 はい、はい。

学円 やあ、どぎどぎと鋭いな。（と鎌を見る。）

晁 月影に……（空へかざす）なお光るんだ。これでも鎌を研ぐとことを覚えさせ。——こつちだ、こつちだ。（と先へ立つ。）

百合 お気をつけ遊ばせよ。（とうるみ声にて、送り出づる時、可愛かわゆき人形袖にあり。）

晁 何だい、こんなもの。（見返る。）

百合 太郎がちよつとお見送り。（と袖でしめつつ）小父おじちゃんもお早くお帰りなさいま

し、坊やが寂しゆうございます。（と云いながら、学円の顔をみまもり、小家の内を指し、うつむいてほろりとする。）

学円（庇う状に手を挙げて、また涙ぐみ）御道理じや、が、大丈夫、夢にも、そんな事が、貴女、（と云つて晁に向きかえ）私に逢うて、里心が出て、君がこれなり帰るまいか、という御心配じや。

百合（きまりわるげに、つと背向になる。）

晁 ああ、それで先刻から……馬鹿、嬰児だな。

学円 何かい、ちよつと出懸に、キスなどせんでも可いかい。

晁 旦那方じやあるまいし、鐘撞弥太兵衛でがんすての。

と兩人連立ち行く。

百合（熟としぼし）まさかと思うけれど、ねえ、坊や、大丈夫お帰んなさるわねえ。おとおお目ン目を瞑つて、頷いて、まあ、可愛い。（と頬摺りし）坊やは、お乳をおあがりよ。母さんは一人でお夕飯も欲しくない。早く片附けてお留守をしましょう。一人だと見て取ると、村の人が煩いから、月は可し、灯を消して戸をしめて。――

と框にずつと雨戸を閉める。閉め果てると、戸の鍵がガチリと下りる。やがて、納戸

の燈、はつと消ゆ。

出る化ものの数々は、一ツ目、見越、河太郎、獺に、海坊主、天守におさかべ、化猫は赤手拭、篠田に葛の葉、野干平、古狸の腹鼓、ポコポン、ポコポン、コリヤ、ポンポコポン、笛に雨を呼び、酒買小僧、鉄漿着女の、けたけた笑、里の男は、のつぺらぼう。

と唄——

与十、竹の小笠を仰向けに、鯉を一尾、嬉しそうな顔して見て、ニヤニヤと笑つて出づ。

与十 大い事をしたぞ。へい、雪さ豊年の兆だちゆう、早は魚の当りだんべい。大沼小沼が干たせいとか、じよんじよる水に、びちやびちやと泳いだ処を、ちよろりと掬つた。：：（鯉跳ねる）わい！ 銀の鱗だ。ずずんと重い。四貫目あるべい。村長様が、大囲炉裡の自在竹に掛つた滝登りより、えつと大え。こりや己がで食おうより、村会議員の髯どのに売るべいわさ。やれ、鯉。髯どのに身売をしろじや。値になれ、値になれ。（鯉跳ねる）ふあ、銀の鱗だ。金が光る——光るてえば、鱗てえば、ここな、（と小屋を見て）鐘撞先生が打つてしめた、神官様の嬢様さあ、お宮の住居にござつた時分は、

背中に八枚鱗が生えた蛇体だと云つけえな。……そんではい、夜さり、夜ばいものが、寝床を覗くと、いつでもへい、白蛇しろへびの長いのが、嬢様のめぐり廻って、のたくるちつて、現に、はい、目のくり球廻らかいて火を吹いた奴やつさえあつけえ。……

鐘撞先生には何事もねえと見えるだ。まんだ、丈夫に活いきてござって、執殺とりころされもさつしやらねえ。見ろやい、取つても着けねえ処に、銀の鱗さ、ぴかぴかと月に光るちつて、汝われかを、（と鯉をじろじろ）ばけものか蛇体と想うて、手を出さずば、うまい酒にもありつけぬ処だつたちゆうものだ。——嬢様が手本だよ。はってな、今時分、真暗まっくらだ。舐殺なめころされはしねえだかん、待ちろ。（と拔足で寄って、小屋の戸の隙間を覗く。）

蟹五郎かにごろう。朱顔あかげがしら、蓬おどろなる赤毛頭あかげがしら、緋ひの衣したる山伏いでたちの扮装やまごぼう。山牛蒡やまごぼうの葉にて捲まいたる煙草たばこを、シャと横よこ銜くわえに、ぱつぱつと煙を噴きながら、両腕を頭上つツばに突張つり、はさみはさみ極きめこ込み、しゃがしゃがんで横よこ這ばいに、ああざかりと歩ある行き寄よって、与十すきみの潜見むこうする向むこうを、ずねずね、かつきと挟くわんで引く。

与十い痛いてえ。（と叫んで）わつ、（と反る時、鯉ぐるみ竹の小笠を夕顔の蔭に投ぐ。）ひ

やあ、藪やぶ沢さわの大蟹おおがにだ。人殺あし！

と怪けし飛ひんで遁にぐ。——蟹五郎かにごろうすかりすかりと横よこに追おう。

鯉七。鯉の精。夕顔の蔭より、するすると顕る。黒白鱗の帷子、同じ鱗形の裁着、鰭のごときひらひら足袋。件の竹の小笠に、面を蔽いながら来り、はたとその小笠を擲つ。顔白く、口のまわり、べたりと髯黒し。蟹、これを見て引返す。鯉七（ばくばくと口を開けて、はつと溜息し）ああ、人間が早の切なさを、今にして思当つた。某が水離れしたと同然と見える。……おお、大蟹、今ほどはお助け嬉しい、難有かつたぞ。

蟹五郎 水心、魚心だ、その礼に及ぼうかい。また、だが、滝登りもするものが、何じやとて、笠の台に乗せられた。

鯉七 里へ出る近道してな、無理な流を抜けたと思え。石に鰭が躓いて、膚捌のならぬ処を、ぼツさりと啖つた奴よ。

蟹五郎 こいつにか。（と落ちたる笠を挟んで压える。）

鯉七 鬼若丸以来という、難儀に逢わせた。百姓めが、汝。（と笠を踏む。）
笠 己じやねえ、己じやねえ。（と、声ばかりして蔭にて叫ぶ。）

鯉七 はあ、いかさま汝のせいでもあるまい。助けてやろう——そりや行け。やい、稲が実つたら案山子になれ！

と放す。しかけて、竹の小笠はたはたと煽つて遁げる。

はははは飛ぶわ飛ぶわ、かぼちやばたけ 南瓜島へ潜つて候。

蟹五郎 人間の首が飛んだ状だな、さま 氣味助、きびすけ 氣味助。かツかツかツ。(と笑い) 鯉七、これからどこへ行く。

鯉七 むう、ちと里方へ用がある。ところで滝を下つて来た。何が、この頃の早で、やれ雨が欲しい、それ水をくれろ、と百姓どもが、ひいさま 姫様のお住居、夜叉ヶ池のほとりへ五う月るさ蠅るさきほどに集つて来せる。それはまだ可よい。が、何の禁ましな厭ないか知れぬまで、かなくぎ 鉄釘、かなひばし 鉄火箸、さびがたな 錆刀や、われなべ 破鍋の尻まで持込むわ。まだしもよ。お供物だと血迷つての、む 犬の首、ひげ 猫の頭、目を剥き、髻を動かし、舌をべらべら吐く奴を供えるわ。きゅうり 胡瓜ならば日野川の河童が嘔かじろう、もつての外な、むそ 汚穢うて汚穢うて、お腰元たちが掃除をするに手が懸かかつて迷惑だ。

ところで、ひいさま 姫様のお乳母どの、ゆのおとうげ 湯尾峠のまんねんうば 万年姥が、それがし 某へ内意まきち 〓 降らぬ雨なら降るまでは降らぬ、向後汚いものなど撒散らすにおいてはその分に置かぬ〓と里へ出て触れい、とある。ためにの、このひれ 鱈まきちを煩わす、厄介な人間どもよ。

蟹五郎 その事かい、御苦勞、御苦勞。ところで、大池のひいさま 姫様には、なかなか雨を下さ

る思召おぼしめしは当分ないかい。

鯉七 分らんの。早は何も、姫様御存じひいさまの事ではない。第一、其許そこもとなども知る通りよ。

姫様は、それ、御縁者、白山はくさんの劍ヶ峰千蛇ヶ池の若旦那にあこがれて、恋し、恋しと、

そればかり思詰めてましますもの、人間の早なんぞ構っている暇があるものかッてい。

蟹五郎 神通じんずう広大——俺をはじめ考えるぞ。さまで思悩んでおいでなさらず、両袖でひ

然らりと飛んで、疾はやく劍ヶ峰へおいでなさるがよ可いではないか。

鯉七 そこだの、姫様ひいさまが座をお移し遊ばすと、それ、たちどころに可おそろ恐ろしい大津波が起

つて、この村里は、人も、馬も、水の底へ沈んでしまふ……

蟹五郎 何が、何が、第一俺が住居すまいも広うなる……村が泥沼になるを、何が遠慮だ。勧め

ろ、勧めろ。

鯉七 忘れたか、鐘つりがねがここにある。……御先祖以来、人間との堅い約束、夜昼三度、打つ

鐘を、彼奴等あいつらが忘れぬ中うちは、村は滅びぬ天地の誓盟ちかひ。姫様ひいさまにも随意ままにならぬ。されば

こそ、御鬱懷ごうつかい、その御ふびんさ、おいとしさを忘れたの。

蟹五郎 南無三宝なむさんぼう、堂の下で誓を忘れて、鐘つりがねの影を踏もうとした。が、山も田圃たんぼもきらきら

とした月夜だ。まだまだしめつた灰も降らぬとなると、俺も沢を出て、山の池、御殿の

長屋へ行かゆずばなるまい。同道を頼むぞ、鯉。

鯉七 むむ、その儀は、ぱくりと合点のみこんだ。かわりにはの、道が寂しい……里へは、きこ

う同道せい。

蟹五郎 帰途かえりはお池へ伴侶みちづれだ。

鯉七 月のなわて暇なわてを、唄うて行ゆこうよ。

蟹五郎 何と唄う？

鯉七 〓山を川にしよう〓と唄おうよ。

蟹五郎 面白い。

と同音に、鯉はふらふらと袖を動かし、蟹は、ぱっぱと煙けむを吹いて、〓山を川にしよう、山を川にしよう〓と同音に唄い行く。行掛けて淀よどみ、行途むちうを望む。

鯉七 待て、見馴みなれぬものが、何やら田あぜの畝あぜを伝うて来る。

蟹五郎 かツかツ、怪こがくしいものだ。小蔭こがくれて様子を見んかい。

両個、姿を隠す。

百合 (人形を抱なまめき、媚かなまめしき風情にて戸を開こがき戸外に出こがづ。)夜の長い事、長い事……

何の夏あけやすが明あけやす易あけやすかろう。坊あけやすやも寝あけやすられないねえ、——お月様幾あけやすつ、お十三、七つ——今

も誰やら唄うて通つたのをお聞きかい、——山を川にしよ——ああ、この頃では村の人が、山を川にもしたかろう、お気の毒だわねえ。……まあ、良い月夜、峰の草も見えるような。晁さん、お客様の影も、あの、松のあたりに見えようも知れないから、鐘堂へ上りましようね。……ひよつとかして、袖でも触つて鳴ると悪いね、田圃の広場へ出て見ようよ。（と小屋のうらに廻つて入る。）

鯉入。花道より、濃い鼠すかしの頭巾、面一面に黒し。白き二根の髯、鼻下より左右にわかれて長く裾まで垂る。墨染の法衣を絡い、鱧の形したる鼠の足袋。一本の蘆を杖つき、片手に緋総結びたる、美しき文箱を捧げて、ふらふらと出で来る。

鯉入 遙々と参つた。……もつての外の早魅なれば、思うたより道中難儀じゃ。（と遙に仰いで）はあ、争われぬ、峰の空に水気が立つ。嬉しや、……夜叉ヶ池は、あれに近い。（と辿り寄る。）

鯉、蟹、前途に立頭る。

鯉七 誰だ。これへ来たは何ものだ。

蟹五郎 お山の池の一の関、藪沢の関守が控えた。名のつて通れ。

鯉入 （杖を袖にまき熟と視て）さては縁のない衆生でないの。……これは、北陸道無双

の靈山、白山、劍ヶ峰千蛇ヶ池の御公達ごきんだちより、当国、三国ヶ岳夜叉ヶ池の姫君へ、文づかいに参るものじや。

鯉七 おお、聞及んだ黒和尚くろおしやう。

蟹五郎 鯉入は御坊ごぼうかい。

鯉入 これは、いずれも姫君のお身内な。夜叉ヶ池の御眷属ごけんぞくか。よい所で出会いました、案内を頼みましょう。

蟹五郎 お使つかい、御苦勞です。

鯉七 ちと申つかつた事があつて、里へ参る路ではあれども、若君のお使、何は措おいても

お供しよう。姫様、お喜びの顔が目に見える。われらもお庇かげで面目を施します、さあ、

御坊。

蟹五郎 さあ、御坊。

鯉入 (ふと、くなくなどなつて得進えまず。) しばらく。まず、しばらく。……

鯉七 御坊、お草臥くたびれなら、手を取りましょう。

蟹五郎 何と腰を押そうかい。

鯉入 いやいや疲れはしませぬ。尾鳍おひれはのららと跳ねるなれども、ここに、ふと、世に

も氣懸りが出来たじやまで。

鯉七 氣懸りとは？ 御坊。

鯉入 ここまで辿つて、いぎ、お池へ参ると思えば、急にこの文箱が、身にこたえて、ずんと重うなつた。その事じや。

鯉七 恋の重荷と言いますの。お心入れの御状なれば、池に近し、御双方お氣が通つて、自然と文箱に籠りましたか。

蟹五郎 またかい。姫様から、御坊へお引出ものなさる。……あの、黄金白銀、米、

粟の湧こぼれる、石臼の重量が響きますかい。

鯉入 (悄然として) いや、私が身に応えた処は、こりや虫が知らすと見えました。

御褒美に遣わさるる石白なれば可けれども〓〓この坊主を輪切りにして、スツポン煮を賞翫あれ、姫、お昼寝の御目覚ましに〓〓と記してあろうも計られぬ。わあ、可恐

しや。(とわなわなと蘆の杖とともにふるい出す。)

鯉七 何でまた、そのような飛んだ事を？ 御坊。……

鯉入 いやいや、急に文箱の重いにつけて、ふと思ひ出した私が身の罪科がござる。さて、言い兼ねましたが打開けて恥を申そう。(と頸をすくめて、頭を撫で) ……近頃、此

方衆しゆうの前ながら、館やかた、劍ヶ峰千蛇ヶ池へ——熊に乗って、黒髪を洗いに来た山女の年増としまがござった。裸身はだかみの色の白さに、つい、とろとろとなつて、面目なや、ぬらり、くらりと鰭を滑らかいてまつわりましたが、フトお目触りめざわとなつて、われら若君、もつての外ほかの御機嫌じや。——処をこの度の文づかい、泥に潜つた閉門中、ただおおせつけの嬉しさに、うかうかと出て参つたが、心付けば、早や鰭の下がくすぽつたい。(とまた震う。)

蟹五郎 かつ、かつ、かつ、(と笑い) 御坊、おまめです。あやかりたい。

鯨入 笑われますか、情なさけない。生命いのちとまでは無うても、鰭、尾を放て、髯ひげを抜け、とほどには、おふみに遊ばされたに相違はござるまい。……これは一期いちごじや、何としよう。

(と寂しく泣く。)

鯉、蟹、これを見て嘔せきき、頷うなずく。

鯉七 いや、御坊、無い事とも言われませぬ。昔も近江街道を通る馬士まごが、橋の上に立つた見も知らぬ婦おんなから、十里前さきの一里塚の松の下の婦おんなへ、と手紙を一通ことづかりし事あり。途中ちゆうちゆう気懸りになつて、密そつとその封じ目を切つて見たれば、〓〓妹御ひとつへ、一、この馬士はらわたの腸一組はらわた参らせ候そう〓〓としたためられた——何も知らずに渡そうものなら、腹を割さか

るる処であつたの。

鯰入 はあ、（とどうと尻餅つく。）

蟹五郎 お笑止だ。かつかつかつ。

鯉七 幸、五郎が鋏はさみを持ちます……密そつと封を切つて、御覧ごらんが可よかろう。

鯰入 やあ、何と、……それを頼たのみたいばかりに恥はづれを曝さらした世迷言よまいごとじや。……嬉うれしや、

大目に見て下さるかのう。

蟹五郎 もつとも、もつとも。

鯉七 また……（と声を密ひそめて）恋ゆかし床ゆかしのお文なれば、そりや、われわれどもがなお見

たい。

鯰入 （わななきながら、文箱を押頂おしき、紐を解く。）

鯉、蟹かにひしと寄よる。蓋ふたを放はなつて齊ひとしく見る。

鯰入 やあ！

鯉七 ええええ。

蟹五郎 やあやあやあ！

鯰入 文箱ふばこの中は水ばかりよ。

と云う時、さつと、清き水流れ溢る。

鯉七 あれあれあれ、姫様が。

はつと鯰入とともに泳ぐ形に腹ばいになる。蟹は跪いて手を支う。——迫上にて——

夜叉ヶ池の白雪姫。雪なす羅、水色の地に紅の焰を染めたる襲衣、黒漆に銀泥、鱗の帯、下締なし、裳をすらりと、黒髪長く、丈に余る。銀の靴をはき、帯腰に玉のごとく光輝く鉄杖をはさみ持てり。両手にひろげし玉章を颯と繰落して、地摺に取る。

右に、湯尾峠の万年姥。針のごとき白髪、朽葉色の帷子、赤前垂。

左に、腰元、木の芽峠の奥山椿、萌黄の紋付、文金の高髻に緋の乙女椿の花を挿す。両方に手を支いて附添う。

十五夜の月出づ。

白雪 ふみを読むのに、月の明は、もどかしいな。

姥 御前様、お身体の光りで御覧するが可うござります。

白雪 (下襲を引いて、袖口の炎を翳し、やがて読果てて恍惚となる。)

椿 姫様。

姥 もし、御前様。

白雪 可懐しい、優しい、嬉しい、お床しい音信を聞いた。……姥、私は参るよ。

姥 たまたま麓へお歩行が。

椿 もうお帰り遊ばしますか。

白雪 どこへ？……（と聞返す。）

姥 お住居へ。

白雪 何？

姥 夜叉ケ池へでござりましょう。

白雪 あれ、お前は何を言う……私の行くのは剣ヶ峰だよ。

一同 剣ヶ峰へ、とおっしゃりますと？

白雪 聞かざと大事なものを——千蛇ヶ池とは知れた事——このおふみの許へさ。（と

巻戻し懐中に納めて抱く。）

姥（居直り）また……我儘を仰せられます。お前様、ここに鐘かござります。

白雪 む、（と眈をあげて、鐘楼を屹と見る。）

姥 お忘れはなさりますまい。山ながら、川ながら、御前様おんまえさまが、お座をお移しなさりますれば、幾万、何千の生類いのちの生命を絶たねばなりません。剣ヶ峰千蛇ヶ池の、あの御方様とても同じ事、ここへお運びとなりますと、白山谷は湖になりますゆえ、そのために彼方かなたからも御越の儀は叶かないませぬ。——姥うばはじめ胸を痛めます。……おいとしい事なれども、是非ない事にござります。

白雪 そんな、理窟を云つて……姥、お前は人間の味方かい。

姥 へへ、(嘲笑あざわら)尾のない猿ども、誰がかばいだてていたしましょう。……憎ければとて、浅ましければとて、気障きざなればとて、たとい仇敵かたきなればと申して、約束はかえられませぬ、誓を破つては相成りませぬ。

白雪 誓盟ちかひは、誰がしたえ。

姥 御先祖代々、近くは、両、親御様まで、第一お前様に御遺言ではございませぬか。

白雪 知っています。(とつんとひぞる。)

姥 もし、お前様、その浅ましい人間でさえ、約束を堅く守つて、五百年、七百年、盟約ちかひを忘れぬではござりませぬか。盟約を忘れませぬばこそ、朝六つ暮六つ丑満つ、と三度の鐘を絶たやしませぬ。この鐘の鳴りますうちは、村里を水の底には沈められぬのでござり

ます。

白雪 ええ、怨めしい……この鐘さえなかつたら、（と熟と視て、すらりと立直り）衆に、
 ここへ来いとお言い。

椿 （立つて一方を呼ぶ。）召します。姫様が召しますよ。

鯉七 （立上がり一方を）やあ、いずれも早く。（と呼ぶ。）

眷属ばらばらと左右に居流る。一同得ものを持てり。扮装おもいおもい、鎧を着たるもあり、鬪體を頭に頂くもあり、百鬼夜行の体なるべし。

虎杖 虎杖入道。

鯖江 鯖江ノ太郎。

鯖波 鯖波ノ次郎。

この両個、「兄弟のもの。」と同音に名告る。

塚 十三塚の骨寄鬼。

蟹五郎 藪沢のお関守は既に先刻より。

椿 そのほか、夥多の道陸神たち、こだますだま、魑魅、魍魎。

影法師、おなじ姿のもの夥多あり。目も鼻もなく、あたまからただ灰色の布を被る。

影法師 影法師も交りまして。

とこの名のる時、ちらちらと遠おちこち近ちかに陰火燃ゆ。これよりして明滅す。

鯉七 身内の面々、一同参り合せました。

鯉入 憚はばかりながら法師もこれに。……

白雪 おお、遠い路を、大儀。すぐにお返事を上げましょうね、そのために皆を呼びましたよ。

姥 や、彼方あなたへお返事につきました、いずれもを召しました？——仰せつけられまする儀は？

白雪 姥うば、どう思うても私は行く。剣ヶ峰へ行かねばならぬ。鐘さえなくば盟約ちかいもあるまい……皆が、あの鐘、取つて落して、微塵みじんになるまで砕いておしまい。

姥 ええええ仰せなればと云うて、いずれも必ずお動きあるな。(眼まなこを光らし、姫を瞻みつめて) まだそのようなわやくをおつしやる。……身うちの衆をお召出し、お言葉ことばがござりましては、わやくが、わやくになりませぬ。天の神々、きこえも可恐おそれじや。……数かずの人間の生命いのちを断つ事、きつとおたしなみなさりませい。

白雪 人の生命いのちのどうなろうと、それを私が知る事か！……恋には我身の生命も要らぬ。

……姥、堪忍して行かしておくれ。

姥 ああ、お最惜いとしいい。が、なりますまい。……もう多しばらく年御辛抱なさりますと、三十年、五十年とは申しますまい。今の世は仏の末法、聖ひじりの澆ぎょう季、盟誓ちかいも約束も最早や忘れております。ヤツと信仰つなを繋ぎますのも、あの鐘を、鳥の啄ついた蔓つた葛かずらで釣つるしましたようなもの、鎖きずなも絆も切れますのは、まのあたりでござります。それまでお堪こらえなさりました。

白雪 あんな気の長い事ばかり。あこがれ慕う心には、冥土よみじの関を据えたとして、夜よのあくるのも待たりようか。可よし、可よし、衆みなが肯きかざば私が自分で。(と氣が入る。)

椿 あれ、お姫様。

姥 これは何となされます……取棄とてて大事な鐘なら、お前様のお手は待たぬ……身内に仰せまでもない。何、唐銅からかねの八千貫、こう瘦やせさらばえた姥が腕でも、指で挟んで棄てましようが、重いは義理でござりまするもの。

白雪 義理おきてや掟おきては、人間の勝手おきてなく、我と我が身をいましめの縄よ。……鬼、畜生、夜叉、悪鬼、毒蛇と言いわゆる私が身に、袖とて、褌つまとて、恋路こいぢを塞ふさいで、遮る雲ひとえの一重ひとえもない！……先祖は先祖よ、親は親、お約束ちかいなり、盟誓ちかいなり、それは都合で遊あそばした。人間と

ても年が経てば、ないがしろにする約束を、一呼吸早く私が破るに、何に憚る事がある！
 ああ、恋しい人のふみを抱いて、私は心も悩乱した、姥、許して！

姥 成程、お気が乱れましたな。朝六つ暮六つただ一度、今宵この丑満一つも、人間が怠れば、その時こそは瞬く間も待ちませぬ。お前様を、この姥がおぶい申して、お靴に雲もつけますまい。人は死のうと、溺れようと、峰は崩れよ、麓は埋れよ。剣ヶ峰まで、ただ一飛び。……この鐘を撞く間に、盟誓をお破り遊ばすと、諸神、諸仏が即座のお祟り、それを何となされます！

鯉七 当国には、板取、帰、九頭竜の流を合せて、日野川の大河。

蟹五郎 美濃の国には、名だたる揖斐川。

姥 二個の川の御支配遊ばす。

椿 百万石のお姫様。

姥 我ままは……

一同 相成りませぬ。

姥 お身体。

一同 大事にござります。

白雪 ええ、うるさ煩いな、お前たち。義理も仁義も心得て、ながいき長生したくば勝手におし。……
生命いのちのために恋は棄てない。お退とき、お退とき。

一同、入乱れて、遮り留とどむるを、振払い、搔かい潜くぐつて、果はては真ま中に取籠とりこめられる。
お退きというに、え……

とじて、鉄てつ杖じょうを抜けば、白銀しろがねの色、月に輝き、一同は、はツと退のく。姫、するすると寄り、颯さつと石段いしだんを駈かけ上のぼり、柱すに縋すがつて屹きつと鐘かねを――

諸神、諸仏は知らぬ事、天の御罰ごばちを蒙こうむつても、白雪の身よ、朝日影あさひかげに、情なさけの水に溶くるは嬉しい。五体は粉に砕けようと、八裂やつさきにされようと、恋しい人を血に染めて、燃えあこがるる魂たまは、幽かすかな螢あせの光となつても、剣ヶ峰つるぎのねへ飛ばいでおこうか。

と晃こう然ぜんとかざす鉄杖てつじょう輝く……時に、月夜つきよを遥はるかに、唄うたの声こゑす。

〓ねんねんよ、おころりよ、ねんねの守はどこへいた、山を越えて里いへ行いつた、里の土産みやげに何貰もらうた、でんでん太鼓たいこに笙しょうの笛ふえ〓〓

白雪 (じつと聞いて、聞惚ききまれて、火焰かえんの袂たもとたよたよとなる。やがて石段の下を呼んで)

姥おばあ、姥おばあ、あの声は？……

姥おばあ 社の百合やしろでござります。

白雪 おお、美しいお百合さんか、何をしているのだろうね。

姥 恋人の晁の留守に、人形を抱きまして、心遣りに、子守唄をうたいまする。

白雪 恋しい人と分れている時は、うたを唄えば紛れるものかえ。

姥 おおせの通りでござります。

一同 姫様、遊ばして御覧じませぬか。

白雪 思いせまつて、つい忘れた。……私がこの村を沈めたら、美しい人の生命もあるま

い。鐘を撞けば仇だけれども、(と石段を静に下りつつ)この家の二人は、嫉しいが、

羨しい。姥、おとなしゅうして、あやかろうな。

姥 (はらはらと落涙して)お嬉しゅう存じまする。

白雪 (椿に)お前も唄うかい。

椿 はい、いろいろのを存じております。

鯉七 いや、お腰元衆、いろいろ知つたは結構だが、近ごろはやる〓〓池の鯉よ、緋鯉よ、

早く出て麩を食え〓〓なぞと、馬鹿にしたようなのはお唄いなさるな、失礼千万、御機

嫌を損じよう。

椿 まあ……お前さんが、身勝手な。

一同（どつと笑う。）——

白雪 人形抱いて、私も唄おう……剣ヶ峰のおつかい。

鯨入 はあ、はあ、はッ。

白雪 お返事を上げよう……一所に——椿や、文箱ふぼこをお預り。——衆みなも御苦勞であつた。

一同敬う。Ⅱでんでん太鼓しやうに笙しょうの笛、起上り小法師こぼしに風車かざぐるまⅡと唄うを聞きつつ、

左右に分れて、おいおいに一同入る。陰火全く消ゆ。

月あかりのみ。遠くに犬吠ほえ、近く五位ごい鷲啼ぎなく。

お百合、いきを切つて、褌つまもはらはらと遁にげ帰り、小家の内こやに駈かけ入り、隠る。あとよ

り、村長 畑上はたがみかでんじ嘉伝次、村の有志ごんどう権藤ごんどう管八、小学校教員齋田初雄、村のものともに

追掛おつかけ出づ。一方より、神官代理鹿見宅膳しかみたくぜん、小力士こりきし、小烏風呂助こがらすふろすけと、前後あとしきに村

のもの五人ばかり、烏帽子えぼし、素袍すおう、雑式ぞうしき、仕丁しちようの扮装いでたちにて、一頭の真黒まっくろき大

牛を率いて出づ。牛の手綱は、小力士これを取る。

村一 内へ隠れただ、内へ隠れただ。

村二 真暗まっくらだあ。

初雄 灯あかりを消したつて夏の虫だに。

管八 踏込んで引摺出せ。

村のもの四五人、ばらばらと跳込む。内に、あれあれと言う声。雨戸ばらばらとはずる。

真中に屹となり——左右を支えて、

百合 何をおしだ、人の内へ。

管八 人の内も我が内もあるものかい。鹿見一郡六ヶ村。

初雄 焼土になろう、野原に焦げようという場合であるです。

宅膳 (ずっと出で) こりや、お百合、見苦しい、何をざわつく。唯今も、途中で言聞

かした通りじや。汝に白羽の矢が立ったで、否応はないわ。六ヶ村の水切れじや。米

ならば五万石、八千人のために、雨乞の犠牲になりましょう！ 小児のうちから知っ

てもおろうが、絶体絶命の早の時には、村第一の美女を取って裸体に剥き……

百合 ええ。(と震える。)

宅膳 黒牛の背に、鞍置かず、荒縄に縛める。や、もつとも神妙に覚悟して乗って行けば

縛るには及ばんてさ。……すなわち、草を分けて山の腹に引上せ、夜叉ヶ池の竜神に、

この犠牲を奉るじや。が、生命は取らぬ。さるかわり、背に裸身の美女を乗せたまま、

池のほとりで牛を屠つて、角ある頭と、尾を添えて、これを供える。……肉は取つて、村一同冷酒を飲んで啖えば、一天たちまち墨を流して、三日の雨が降灌ぐ。田も畠も蘇生るとあるわい。昔から一度もその験のない事はない。お百合、それだけの事じや。我慢して、村長閣下の前につけても御奉公申上げい。さあ、立とう、立ちましよう。百合 叔父さん、何にも申しません、どうぞ、あの、晁さん、旦那様のお帰りまでお待ちなすつて下さいまし。もし、皆さん、堪忍して下さいまし。……手を合せて拝みます。そ、そんな事が、まあ、私に……

管八 何だとう？

初雄 貴女、お百合さん、何ですか。

百合 叔父さん、後生でございます……晁さんの帰りますまで。

宅膳 またしても旦那様じや。晁、晁と呆れた奴めが。これ、潮の満干、月の数……今日の今夜の丑満は過ぎれぬ。立ちましよう、立ちましよう。

管八 言うことを肯かんと縛り上げるぞ。

嘉伝次 村、郡のためじや、是非がない。これ、はい、気の毒なものじやわい。

管八 お神官、こりやいかんでえ？

宅膳 引立てて可うござる。

管八 来い、それ。

と村のもの取込む。百合遁げ迷う。

風呂助 塚あかんのう。私にまかせたが可うござんす。

とのさばり掛り、手もなく抱すくめて掴み行く。仕丁手伝い、牛の背に仰げざまに置く。

百合 ああれ。(と悶ゆる。)

胴にまわし、ぐるぐると繩を捲く。お百合背を捻じて面を伏す。黒髪颯と乱れて長く牛の鱗爪に落つ。

嘉伝次 宅膳どん、こりや、きものを着ていて可いかい。

宅膳 はあ、いずれ、社の森へ参つて、式のごとく本支度に及びまするて。社務所には、

既に、近頃このあたりの大地主になれましたる代議士閣下をはじめ、お歴々衆、村民一同の事をお憂慮なされて、雨乞の模様を御見物にお揃いでござりますてな。

嘉伝次 その事じゃつけね。

初雄 皆、急ぐです。

管八 諸君努力せよかね、ははははは。

一同、どやどやと行きかかる。

晃 (衝と来り、前途に立つて、屹と見るより、仕丁を左右へ払いのけ、はた、と睨んで、牛の鼻頭を取つて向け、手繩を、ぐい、と緊めて、ずかずか我家の前。腰なる鎌を抜くや否や、無言のまま、お百合のいましめの繩をふツと切る。)

百合 (一目見て) おお晃さん、(ところげ落ち、晃のうしろに身をかくして、帯の腰に取継り) 旦那様、いい処へ。貴下。どうして、まあ、よく、まあ、早う帰つて下さいました、ねえ。

晃 (百合を背後に庇い、利鎌を逆手に、大勢を睨めつけながら、落着いたる声にて) ああ、夜叉ヶ池へ——山路、三の一ばかり上った処で、峰裏幽に、遠く池ある処と思うあたりで、小児をあやす、守唄の音が聞えた。……唄の声がこの月に、白玉の露を繋いで、蓬の草も綾を織つて、目に蒼く映つたと思え。……伴侶が非常に感に打たれた。——山沢には三歳になる小児がある。……里心が出て堪えられん。月の夜路に深山路かけて、知らない他国に徜徉うことはまた、来る年の首途にしよう。帰り風が颯と吹く、と身体も寒くなつたと云う。私もしきりに胸騒ぎがする。すぐに引返して帰つたんだ

よ。(と穩おだやかに、百合に向つて言い果てると、すつと立つて、瓢ひさじを逆さかに、月を仰いで、ごつと飲む。)

百合、のび上つて、晃ひもが紐くびを押え頸くびに掛けたる小笠おがさを取り、瓢ひさじを引く。晃ひもはなすを、受け取つてかまち框かまちにおく。すぐに、鎌を取ろうとする。晃ひも、手を振つて放さず、お百合、しかとその晃ひもの鎌を持つ手に縋すがりいる。

晃 帰れ、君たちア何をしている。

初雄 あらた更めて断るですがね、君、お気の毒だけれども、もう、村を立去つてくれたまえ。
晃 俺をこの村に置かんと云うのか。

初雄 しかりです。——御承知でもあるでしょう、また御承知がなければ、恐らく白痴ばかと言わんけりやならんですが、この早ひでりです、早魃かんぼつです。……一滴の雨といえども、千金、むしろ万金の場合にですな。君が迷信さるる処つりがねのその鐘かねはです。一度でも鳴らさない時はすなわちその、村が湖になると云うです。湖になる……結構ですな。望む処である、です、から、して、からに、そのすなわちです。今夜からしてお撞つきなさらない事にしたのです。鐘を撞かん事になってみる日になってみると、いたしてから、その、鐘を撞くための君はですな、名は権助と云うかどうかは分からんですが、ええん！

村二三 ひやひや。(と云う。)

村四五 撞木野郎、丸太棒。(と怒鳴る。)

初雄 えへん、君はこの村において、肥料の糟にもならない、更に、あえて、しかしてその、いささかも用のない人です。故にです、故にですな、我々一統が、鐘を、お撞きになるのを、お断りを、しますと同時に、村を、お立ち去りの事を宣告するのであるです。村二三 そうだ、そうだとも。

晃 望む処だ。……鐘を守るとも守るまいとも、勝手にしろと言われるから、俺には約束がある……義に依て守っていたんだ。鳴らすなど言うに、誰がすき好んで鐘を撞くか。勿論、即時にここを去る。

村四五 出て行け、出て行け。(と異口同音。)

晃 お百合行こう。——(そのいそいそ見繕いするを見て) 支度が要るか、跣足で来い。茨の路は負って通る。(と手を引く。)

お百合その袖に庇われて、大勢の前を行く。——忍んで様子を見たる、学円、この時密とその姿を顕す。

管八 (悪く沈んだ声して) おいおい、おい待て。

晃（構わず、つかつかと行く。）

管八 待て、こちら！

晃 何だ。（と衝と返す。）

管八 汝きさま、村のものは置いて行け。

晃 塵ちりひとつ葉はも持つちや行かんよ。

管八 その婦おんなは村のものだ。一所に連れて行く事は出来ないのだ。

晃 いや、この百合は俺の家内だ。

嘉伝次 黙りなさい。村のものじゃわい。

晃 どこのものでも差支えん、百合は来たいから一所に来る……留とどまりたければ留るんだ。

それ見ろ、萩原に縋すがつて離れやせん。（微笑して）置いて行けば百合は死のう……人は、

心のままに活いきねばならない。お前たちどもに分るものか。さあ、行ゆこう。

宅膳（のしと進み）これこれ若いもの、無分別はためにならんぞ。……私わしが姪めいは、ただ

この村のものばかりではない。一郡六ヶ村、八千の人の生命いのちじゃ、雨乞あまごいの犠牲にえにして

な。それじゃに、……その犠牲の女を連れて行くのは、八千の人の生命を、お主ぬしが奪取

つて行くも同然。百合を置いて行かん事には、ここは一足も通されんわ。百合は八千の

人の生命じゃが。……さあ、どうじゃい。

学円　しばらく、（声を掛け、お百合を中に晁と立並ぶ。）その返答は、萩原からはしくかろう。代つて私が言う。——いかにも、お百合さんは村の生命じゃ。それなればこそ、華胃の公子、三男ではあるが、伯爵の萩原が、ただ、一人の美しさのために、一代鐘を守るではないか——既に、この人を手籠めにして、牛の背に縄目の恥辱を与えた諸君に、論は無益と思うけれども、衆人環視の中において、淑女の衣を奪うて、月夜を引廻すに到つては、主、親を殺した五逆罪の極悪人を罪するにも、洋の東西にいまだかつてためしを聞かんぞ！

そりやあるいは雨も降ろう、黒雲も湧き起ろうが、それは、惨憺たる黒牛の背の犠牲を見るに忍びないで、天道が泣かるるのじゃ。月が面を蔽うのじゃ。天を泣かせ、光を隠して、それで諸君は活きるるか。稲は生きても人は餓える、水は湧いても人は渴える。……無法な事を仕出して、諸君が萩原夫婦を追うて、鐘を撞く約束を怠つて、万一、地が泥海になつたらどうする！ 六ヶ村八千と言わるるか、その多くの生命は、諸君が自ら失うのじゃ。同じ迷信と言うなら言え。夫婦仲睦じく、一生埋木となるまでも、鐘楼を守るにおいては、自分も心を傷けず、何等世間に害がない。

管八 黙れ、煩い。汝が勝手な事を言うな。

初雄 一体君は何ものですか。

学円 私か、私は萩原の親友じゃ。

宅膳 藪から坊主が何を吐す。

学円 いかにも坊主じゃ、本願寺派の坊主で、そして、文学士、京都大学の教授じゃ。山

沢学円と云うものです。名告るのも恥入りますが、この国は真宗門徒信仰の淵源地じ

や。諸君のなかには同じ宗門のよしみで、同情を下さる方もあろうかと思つて云います。

(教員に) 君は学校の先生か、同一教育家じゃ。他人でない、扱つてくれたまえ。(神

んぬし) 官に) 貴方も教えの道は御親類。(村長に) 村長さんの声名にもお縋り申す。……

(力士に) な、天下の力士は俠客じゃ、男立と見受けました。……何分願いま

す、雨乞の犠牲はお許しを頼む。

これがために一同しばらくためらう。……代議士穴隈鉦蔵、葉巻をくゆらしながら、

悠々と出づ。

鉦蔵 其奴等騙賊じゃ。また、騙賊でのも、華族が何だ、学者が何だ、糧をどうする

!……命をどうする?……万事俺が引受けた。遣れ、汝等、裸にしようが、骨を抜こ

うが、女郎一人と、八千の民、誰か鼎の軽重を論ぜんやじや。雨乞を断行せい。

力士真先に、一同ぼらりと立懸る。

学円 私を縛れ、（と上衣を脱ぎ棄て）かほど云うても肯入れないなら止むを得ん、私を縛れ、牛にのせい。

晃（からりと鎌を棄て）いや、身代りなら俺を縛れ。さあ、八裂にしろ、俺は辞せん。
——牛に乗せて夜叉ケ池に連れて行け。犠牲によつて、降らせる雨なら、俺が竜神に談判してやる。

百合 あれ、晃さん、お客様、私が行きます、私を遣つて下さいまし。

晃 ならん、生命に掛けても女房は売らん、竜神が何だ、八千人がどうしたと！ 神にも仏にも恋は売らん。お前が得心で、納得して、好んですると云つても留めるんだ。

鉾蔵（ふわふわと軽く詰め寄り、コツコツと杖を叩いて）血迷うな！ たわけも可い加減にしろ、女も女だ。湯屋へはどうして入る？……うむ、馬鹿が！（と高笑いして）君たち、おい、いやしくも国のためには、妻子を刺殺して、戦争に出るといふが、男児たるものの本分じや。且つ我が国の精神じや、すなわち武士道じや。人を救い、村を救うは、国家のために尽すのじや。我が国のために尽すのじや。国のために尽すのに、一

晩媽々を牛にのせるのが、さほどまで情ないか。 洩垂しが、俺は料簡が広いから可い、気の早いものは国賊だと思うぞ、汝。俺なぞは、鉾蔵は、村はもとよりここに居るただこの人民蒼生のためというにも、何時でも生命を棄てるぞ。

時に村人は敬礼し、村長は頤を撫で、有志は得意を表す。

晃 死ぬ！（と云うまま落したる利鎌を取つてきつと突つく。）

鉾蔵 わあ。（と思わず退る。）

晃 死ぬ、死ぬ、死ぬ、民のために汝死ぬ。見事に死んだら、俺も死んで、それから百合を渡してやる。死ぬ、死ないか。

とじりりと寄るたび、鉾蔵ひよこひよここと退る。お百合、晃の手に取継ると、継られた手を震わしながら、

し、しからずんば決闘せい。

一同その詰寄るを、わつわと遮り留む。

傍へ寄るな、口が臭いや、こいつらも！ 汝等は、その成金に買われたな。これ、

昔も同じ事があつた。白雪、白雪という、この里の処女だ。権勢と迫害で、可厭がるものを無理に捉えて、裸体を牛に縛めて、夜叉ヶ池へ追上せた。……処女は、口惜しさ、

恥かしさ、無念さに、生きて里へ帰るまい。其方も……其方も……追つては屠らるる。同じ生命を、我に与えよ、と鼻頭を撫でて牛に言い含め、終夜芝を刈りためたを、その牛の背に山に積んで、石を合せて火を放つと、鞭を当てるまでもない。白い手を挙げ、衝とさして、麓の里を教うるや否や、牛は雷のごとく舞下つて、片端から村を焼いた。……麓にぱつと塵のような赤い焰が立つのを見て、笑を含んで、白雪は夜叉ヶ池に身を沈めたというのを聞かぬか。忘れたか。汝等。おれたちに指でも指してみろ、雨は降らいで、鹿見村は焰になろう。不埒な奴等だ。

鉾蔵 世迷言を饒舌るな二才。村は今既に早の焰に焼けておる。それがために雨乞するのじゃ。やあ衆、手ぬるい、遣れ遣れ。(いずれも猶予するを見て) 埒明かな、伝吉ども来い。(と喚く。)

博徒伝吉、威の長ドスをひらめかし、乾児、得ものを振って出づ。

伝吉 畳んでしまえ、畳んでしまえ。

乾児 合点だ。

晃 山沢、危いぞ。

とお百合を抱くようにして三人鐘楼に駈上る。学円は奥に、上り口に晃、お百合、

と互に楯たてにならんと争う。やがて押退おしのけて、晃、すつくと立ち、鎌かぎを翳す。博徒、衆ともに下より取巻く。お百合、振上げたる晃の手に縋すがる。

一同 遣れ遣れ、遣つちまえ、遣つちまえ。

学円 言語道断、いまだかつて、かかる、頑冥がんめい暴虐ぼうぎやくの民を知らん！ 天に、——天に

銀河白し、滝となつて、落ちて来い。（合掌す。）

晃 大事な身体からだだ、山沢は遁にげい、遁にげい。

と呼ばわりながら、真前まっさきに石段を上れる伝吉と、二打三打ふたうちみうち、稻妻のごとく、チャリりと合す。

伝吉退く。時に礫つぶてをなげうつものあり。

晃 （額きずつに傷き血おさを圧えて）あッ。（と鎌を取落す。）

百合 （サソクにその鎌を拾い）皆さん、私が死にます、言分いぶんはごさんすまい。（と云うより早く胸さきを、かッしと切る。）

晃 しまった！（と鎌もぎとを振取る。）

百合 晃さん——御無事で——晃さん。（とがっくり落入る。）

一同 色沮いろはばみて茫然ぼうぜんたり。

晃 一人は遣らん！ 茨の道は負つて通る。冥土で待てよ。（と立直る。お百合を抱ける、

学円と面を見合せ）何時だ。（と極めて冷静に聞く。）

学円 （沈着に時計を透かして）二時三分。

晃 むむ、夜ごとに見れば星でも了る……ちようど丑満……そうだろう。（と昂然と

して鐘を凝視し）山沢、僕はこの鐘を搗くまいと思う。どうだ。

学円 （沈思の後）うむ、打つな、お百合さんのために、打つな。

晃 （鎌を上げ、はた、と切る。どうと撞木落つ。）

途端にももの凄き響きあり。——地震だ。——山鳴だ。——夜叉ケ池の上を見い。夜

叉ケ池の上を見い。夜叉ケ池の上を見い。真暗な雲が出た、——と叫び呼わる程こ

そあれ、閃電来り、瞬く間も歇まず。衆は立つ足もなくあわて惑う、牛あれて一蹴

りに駈け散らして飛び行く。

鉦蔵 鐘を、鐘を——

嘉伝次 助けて下され、鐘を撞いて下されのう。

宅膳 救わせたまえ。助けたまえ。

と逃げまわりつつ、絶叫す。天地晦冥。よろぼい上るもの二三人石段に這いかかる。

晃、切払い、追い落とし、冷々然として、峰の方かたに向つて、学円と二人彫像のごとく立ちつつあり。

晃
波だ。

と云う時、学円ハタと俯伏うつぶしになると同時に、晃、咽喉のどを斬きつて、うつぶし倒る。

白雪。一際ひときわ烈はげしきひかりものの中に、一たび、小屋の屋根に立たち頭あれ、たちまち真暗まつくらに消ゆ。再びすさまじい凄なじき電びかりに、鐘楼かねろうに來り、すつくと立ち、鉄てつ杖じょうを丁ちようと振つて、

下より空さまに、鐘に手を掛く。鐘ゆらゆらとなつて傾く。

村一同昏迷こんめいし、惑乱するや、万年姥まんねんうば、諸眷属しよけんぞくとともに立ちかかつて、一人も余

さずことごと尽とほく屠ころり殺す。――

白雪 姥うば、嬉しいな。

一同 お姫様。(と諸声もろこえ凄すずし。)

白雪 人間は？

姥 皆、魚うおに。早や泳いでおります。田螺たにし、鱒どじょうも見えまする。

一同 (哄どつと笑う) はははははははは。

白雪 この新しい鐘ケ淵ふちは、御夫婦の住居すまいにしよう。皆おいで。私は劍ケ峰ゆへ行くよ。…

…もうゆきかよいは思いのまま。お百合さん、お百合さん、一所に唄をうたいましようね。

たちまちまた暗し。既にして巨鐘きよしょう水みづにあり。晁、お百合と二人、晁は、竜頭りゅうづに頬杖ほおづえつき、お百合は下に、水みづに裳もすそをひいて、うしろに反らして手を支き、打仰いで、熟じつと顔を見合せ莞爾にっこりと笑む。

時に月の光煌々こうこうたり。

学円、高く一人鐘しょう楼ろうに佇たたずみ、水に臨んで、一揖いちゆうし、合掌す。

月いよいよ明あきらなり。

(——幕)

大正二(一九一三)年三月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 卷二十五」岩波書店

1942（昭和17）年8月31日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

※底本の編者による脚注は省略しました。

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2002年2月22日公開

2015年4月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜叉ヶ池

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>